

のです。)で、3ヶ月間、週5日このトレーニングを受けて、質の高いティナラク織者になるとともに、組合員として自分たちの生活を向上させていくためのプロジェクトです。私が行ったときはまだトレーニングが始まったばかりで、アバカの繊維から糸作りをしているところでした。トレーニング前に行われた「組合について」のセミナー(3日間)の感想を、まとめ役をしているアイディーンに聞いてみました。

- ① 日々の生活に必要な知識(家計について、など)を得られた。
- ② 協同組合という、集団になることで得られる利点、出来ることなどを知った。
- ③ 女性でも何かを創り出したり稼いだりできる、と実感できた。
- ④ 生活態度が変わった(時間を無駄にしなくなった)。
- ⑤ 夫たちも喜んで妻を送り出してくれている。



と、たくさんの利点を聞くことが出来ました。また、このトレーニングがあることによって、仕事ができるようなるチャンスとなったことに感謝しているのだが、仕事が無くなるように販路拡大の道もぜひ考えてほしい、と言っていましたので、『それは私たちの仕事ではなく、この事業支援を受けたCOWHEDの仕事である』ことをスタッフと確認してきました。自分たちの力でやっていく、ということを経験する場面を一つ一つ確認していくことが自立につながるのではないかと考えるからです。

また販路拡大にともなう重要なポイントに「品質向上・維持・管理」がありますが、これはまだまだ、これからも繰り返し話し合う必要があると思われました。「良い物は売れる」という感覚が希薄なため、私たちからすれば、買いたくないようなレベルのものも平気で出荷したりしていたのを、この3年間ずーっと言い続けて来たことで、多少は分かってくれているかな・・と期待はしていますが、「教育」は時間がかかりますから、気長にしつこくやっていくしかありません。しかし、商業ベースに乗せることへの問題点や、伝統工芸品が生き残っていくための解決策など、沢山の難門が立ちまわっています。

さて、CMBの方では、ラムブソン、トゥラムボン、サムラングの各コミュニティを訪問してきました。中でも、ラムブソン小学校のマリオ先生は、本当に一生懸命コミュニティ向上のために力を尽くしていて、その献身的な働きぶりにとても感動しました。去年の事業(これもFIDR助成事業)で立ち上げた農家協同組合もきちんと運営されていて、共同購入の方も順調に売れているので、組合の資金が増えつつあり、組合が組合員の農作物を購入できるようになる日もそう遠くないようです。

ここは今年度小学生の数が増えたので、教室が足りないのが悩みの一つでもあるのですが、いろんな場面で少しずつ前進しているのが感じられる地域なので、一步一步自分たちの手で問題を解決していく力をつけていくのだろうと期待し、これからも訪問をしつづけたいと思いながら山を下りました。

いまだに政情が不安定とされるミンダナオ島。日本とあまりにも違う時間の流れとともに生きる人々。いろんな習慣や常識は、日本のものさしではとてもはかれない状況・・。

私たちがこれからも考え続けていくことは何か。同じ地球に生きる人として、問い続けていきたいということを表明して、報告を終わります。

— コミュニティーだより —

* 伝統のフィエスタを通じて、近隣入植者との関係改善を!

アトゥモロック・コミュニティでは、近年入植して来た(ピラーン族の認識では、不当に土地を奪った)近隣集落住民との関係がまた悪化していて、アトゥモロック住民は、けものみちを整備して、入植者集落を迂回する道を急遽完成させました。

1996年に、ノノイ神父の案内で私たちが初めてアトゥモロックを訪ねてから、この4年の間に、校舎建設から始まったHANDSの支援は、奨学金支給、簡易水道建設、組合育成と広がりました。一方で、訪問する度に通過する近隣入植集落の住民の目が気になりました。入植者と先住民族の間にCMBが介在し、さらに日本のNGOが関わることで、新たな問題が生じないかと、漠然とした不安を感じていました。

現CMBディレクターFr.デオは、このような近隣集落との関係改善や地元自治体の理解と協力を得ることに力を注いでいます。「10月3日に行われる恒例のアトゥモロックの伝統的まつりフィエスタ